

## 熊野古道なかへち美術館

本年度は特別展と3つの館藏品展の4展覧会を開催します。

まず春に開催の「自然に学ぶ」では、熊野の自然に関連した雑賀清子の水彩および点描作品を紹介します。

「森の記憶」は夏休みのための特別展です。人類最古の原始の布と言われるフェルトを使い「記憶」をテーマに制作してきた熊澤明子が、熊野やフィンランドで経験した森の記憶を表現します。テキスタイル作品の展示は当館初めての試みです。会期中、年齢を問わず参加できるワークショップも予定しています。

「渡瀬凌雲展」では、凌雲と、同時代の南画家たちにとっての展覧会についてをテーマとします。数々の展覧会に出品を繰り返し、その経験から多くを学んだ凌雲にとって、展覧会とはどのようなものだったのかを探ります。

本年度最後の「野長瀬晩花展」は、冬休みから春休み期間の開催です。子どもたちやご家族連れで、クイズを解きながら晩花の作品をお楽しみください。

## 展覧会の見どころ

### 田辺市立美術館

本年度は施設修繕のため6月いっぱいまで臨時休館します。その後、7月から2つの特別展と小企画展、館藏品展の4展覧会を開催します。

まず最初に開催する「海を想う」展は、北海道、本州、四国、九州の4つの美術館が連携して開催する特別展で、それぞれの館のコレクションを軸に「海」を題材とした作品を展覧して、そこから見える地域性や海と人との文化的な関わりについて探るものです。

また、翌年2月から3月にかけては、開館間もない1997(平成9)年に開催して以来の「原勝四郎展」を開きます。この間に蓄積してきた作品、資料の調査研究をもとに新たな原勝四郎像の構築に向けての契機にしたいと思います。

これら特別展の開催に加え、日本では数少ないタピスリー作家の第一人者である潮隆雄の近作を紹介する小企画展や、館藏品展として文人画を主としたコレクションの紹介を予定しています。

## 田辺市立美術館 熊野古道なかへち美術館 展覧会(2010年4月~2011年3月)



原勝四郎《瀬戸風景》 1935(昭和10)年  
田辺市立美術館蔵

## 絵画と出会う「この一点!」



雑賀清子《秋ののげし》 1983(昭和58)年  
熊野古道なかへち美術館蔵

### ★館藏品展 自然に学ぶ—雑賀清子の作品より 会期:4月10日(土)~5月30日(日)

日本中で、おそらく土の見えるところならどこにでも、当然のように姿を現わす植物—ノゲシ(野芥子)は、ほとんど季節を限定できないほどの長期に亘って、道端や近くの空き地、思いもかけない所で黙々と咲いています。日々そのことを私たちは特に気にかけることもありませんが、雑賀清子は「荒地にもめげず、胸を張ってその存在感を示す。その姿が想像以上に美しく、つつい筆を持つ。」といい、元気よく咲いた盛りの花よりも、朽ち行く植物の姿に生命を感じ、その色彩に目を見張ります。

雑賀は本来油彩画を中心に制作する画家ですが、この水彩画には日本画の手法をも学んだあとが窺え興味深く鑑賞することができます。公に発表するつもりがなかったことから、試作用の簡易な利休屏風に描かれています。紅葉し始めたノゲシの秋の姿を描いたものです。

(学芸員 山本 泰代)

## 利用案内



**田辺市立美術館**  
■開館時間  
午前10時~午後5時  
(入館は午後4時30分まで)  
JR紀伊田辺駅から明光バス  
[新庄紀南病院前]下車、徒歩5分。  
〒646-0015  
和歌山県田辺市たきない町24-43  
TEL.0739-24-3770  
FAX.0739-24-3771



**田辺市立美術館分館  
熊野古道なかへち美術館**  
■開館時間  
午前10時~午後5時  
(入館は午後4時30分まで)  
JR紀伊田辺駅から龍神バス  
[なかへち美術館]下車。  
〒646-1402  
和歌山県田辺市中辺路町近露891  
TEL.0739-65-0390  
FAX.0739-65-0393

## 田辺市立美術館へのきもち③

春には山菜・梅・桜、秋には秋の草花が植えられた小道を通りぬけると瀟洒な建物の入口にたどりつく。

田辺市立美術館、この入口付近の風情はいつも心なごみます。10年程前に南紀熊野体験博が開催されたときの展覧会には、遠く東京や大阪方面の人達も大勢見に来られ、田辺駅近くでご案内したことを思い出します。

私も絵を見ることは大好きで、昨年、一昨年には「智恵子抄展」「野長瀬晩花展」「文人画館蔵作品展」「山本丘人展」「浜口陽三展」と行きました。とても良かったです。

一昨年に田辺市立美術館、熊野古道なかへち美術館両館で開催された「野長瀬晩花展」は、熊野古道なかへち美術館へも見に行きたいと思いつつ、乗り物に乗れない私にはバスの便が少ないのがネックでした。また、交通の不便さもありますが、熊野古道なかへち美術館は休館が多いのが残念で、田辺駅近くの観光案内センターで、古道に行く人、近露に行く人に熊野古道なかへち美術館をご案内したいとは思いますが「いつ行っても開いています。」と言えなくて残念に思います。

最近、美術館に来られている人が少ないように思います。市民の皆様、小学生、中学・高校生の人達も、もっと美術館へ出かけて、実際の作品を鑑賞して、楽しんでほしいと思います。

美術館へ大いに足を運ばれると、きっと楽しく新しい発見があると思います。  
(田辺観光ボランティアガイドの会 池田 千壽子)

## 編集後記

この号が出る頃には桜が見ごろとなっているでしょうか。今年は熊野古道なかへち美術館近くの有名なだけ桜を見に行く計画を立てています。展覧会スケジュールは切り抜いて、折って、携帯してください。今年度も素敵な展覧会を皆様にお届けできるよう頑張っていきますので、どうぞご期待ください! 多くの皆様のご来館をお待ちしています。(本館 M.M.)

# ORANGE

田辺市立美術館NEWS  
Vol.12



稗田一穂《水影》 1962(昭和37)年

田辺市立美術館蔵

## 「水影」を描いていた頃

今はかなり遠い過去となった感じがするが、戦後に日本画第二芸術論や、はては日本画滅亡論も論じられる頃に、私は画壇の中に第一歩を踏み出した様に思う。昭和二十三年創造美術が発足して間もなくの、戦後のあらゆる分野で、混迷の真只中であつた世相でもあつた。

図版の「水影」は、毎日新聞社主催の現代日本美術展に出品した作品で、この頃「水」をテーマとして扱いはじめた初期のものである。水は投影や透視で、透明正確な印象があるが決してそうではない。水を透して見える予期しない形の歪みや、ずれの想像外の造形の美しさに、胸のときめきさえ感じる時がある。

水鳥の長い脚や、水草や葦の茎の水中での不思議さが漂う。然し、確実な存在感とそれ等の並列や複雑な重列、粗密の繁茂等、地上で見る植物と異なる水中に息づく草々の魅力に惹かれる。この頃度々裏磐梯の五色沼の、透明な湖の浅い岸に、僅かに揺れる水草群に交わって、ピンクや萌葱色の不思議な水草の群れの、幻想を誘う美しさに魅せられて、数年間度々写生に通つたものである。

画面の白鳥は、水面上の在ると、水面下の幻想的な形態の連携の為に配したものである。画面の構成力が弱いことが目下の日本画の欠点であるがこの頃思い詰め、意識が余りにも偏り過ぎ画面が硬直して、個々の有機的な感情の繋がりを忘れた反省の時期でもあつた。白鳥は水面下の草藻や葉や投影等と同質の象徴化でバランスを考慮した。

私が学校を卒業して画壇に作品を発表する頃、古い伝統に縛られた日本画壇の世界があつた。真実の立派な伝統でな

く、型式的観念的な、現在の息吹きが全く感じられぬ世界に、如何に生きいきした作品を示す事が出来るかの、使命を感じていた。日本画には「山水画」(風景画)の外に、西洋画に観られない「花鳥画」と称する分野がある。先ずその花鳥画に今迄に見当らぬ様な作品が出来ぬものか、その糸口から何か発展出来るのでないかと期待を込めて、先ず題材に、鶴であれば丹頂の鶴でなく、真那鶴や鍋鶴、そしてアフリカの人の漆黒の縮れ毛そっくりの、頭部の羽毛の様相が異様な美しさを持つ冠鶴、黒とき、ふさホ口ホ口鳥、鸚鵡等、それ等が醸し出す独特のニュアンスや、強烈な個の主張から、何かを抽出し今迄に無かつた花鳥画からの発展に連なるのではないかと考えたものである。その試行錯誤の連続である。

想えば田辺の浜辺で、美術学校の夏期制作の宿題の為に、ハマボウフウの花を写生していた時、何処からか突然に、腰のサーベルを鳴らし乍ら陸軍の将校が近づき、「海岸を描いてはならん」と忠告された。横柄な余りにも思いがけぬことに不快な暗い気持ちに沈んだことを想い出す。戦中で軍の後援もつた「海洋美術展」に、横浜埠頭に碇泊中の外国貨物船のグレーの塗装が珍しくて、タラップや、憩う異国の水夫の姿に興味を持ち描いて出品した作品にすら、展覧会終了後返却された作品の裏面に、海軍の検査済みの大きな印が、ベタリと無雑作に押し貼られてあるのを見て、味気ない啞然としたショックを感じたものでもあつた。戦後の自由になった空気の中でこの作品を描いていた頃、その表裏の様な激しい世の中の移り変りに置かれた頃の、新鮮に映った時代が妙に懐かしい。(稗田 一穂)

※今回特別に作者の稗田一穂氏より自作についてご寄稿をいただきました。

## 田辺市立美術館NEWS ORANGE Vol.12

発行年月日:平成22年4月1日  
編集・発行:田辺市立美術館/熊野古道なかへち美術館

# 描かれた海

古来より海と人々の生活は切っても切り離せないものです。生活の糧を得る恵みの海から、台風や津波など時に猛威をふるう自然への恐れ、また海外へ開かれた港など、島国に住む私たち日本人にとって、海は生活と密接に関わっています。そのため多くの画家たちの視線が、日本各地の海に向けられてきました。砕ける波頭、漂う船団、落日に染まる水面など、時とともに刻々と変化する海は、各々の色と形をもって、画家の個性と相まった多様な表現が蓄積されてきました。

今夏に開催する特別展「海を想う―海に魅せられた画家たち―」は、北海道、本州、四国、九州の四つの美術館(釧路市立美術館・田辺市立美術館・八幡浜市民ギャラリー・唐津市近代図書館)が連携し、全国を縦断する巡回展として開催されます。九州の唐津市は、古くから漁業、交易の港として栄え、四国の八幡浜市、北海道の釧路市は太平洋をわたる遠洋漁業の基地として歴史を刻んできました。田辺市は風光明媚な南紀白浜に隣接し、多くの画家が滞在し作品を残しています。漁港、交易港、景勝地など、関わり方はさまざまながら、人々が海とかかわってきた地域の歴史が、おのずと美術作品にも現れています。これら4館の所蔵作品を軸に、全国各地の海を題材とした絵画作品を展覧することにより、そこに色濃く映る「地域性」を検証します。さらに、北から南まで、地域によってさまざまに注がれてきた画家の視点から、人々と海の文化的な関わりについても探ります。

(学芸員 辰巳 充)



鍋井克之《熊野灘のみえる丘》1963(昭和38)年 田辺市立美術館蔵

## INFORMATION

★特別展:「海を想う―海に魅せられた画家たち―」  
 会期 / 7月19日(月・祝)~9月12日(日)  
 休館日 / 毎週月曜日(但し7月19日は開館)・7月20日(火)  
 主催 / 田辺市立美術館・海を想う展実行委員会  
 助成 / 財団法人 地域創造  
 観覧料 / 一般 600円(480円)  
 大学・高校生 400円(320円)  
 中学生・小学生 200円(140円)  
 ( )内は20名以上の団体料金です。  
 土曜日は中学生・小学生及び同伴する保護者や指導者の観覧料は無料です。

# 記憶の森



《万華鏡》 2003(平成15)年

## INFORMATION

★特別展:「森の記憶―熊澤明子テキスタイルの世界」  
 会期 / 7月17日(土)~9月5日(日)  
 休館日 / 毎週月曜日(但し7月19日は開館)・7月20日(火)  
 主催 / 熊野古道なかへち美術館  
 観覧料 / 一般 210円(160円)  
 大学・高校生 150円(120円)  
 中学生・小学生 100円(70円)  
 ( )内は20名以上の団体料金です。  
 土曜日は中学生・小学生及び同伴する保護者や指導者の観覧料は無料です。

夏休みのための特別企画として、熊野古道なかへち美術館では熊澤明子によるテキスタイルアートの世界を紹介します。

熊澤は、図版の2003(平成15)年に発表した高さ4メートルにもなる大作《万華鏡》に次のような言葉を付しています。

記憶は誇張され、美化され、忘れられる。そして時々、鮮やかに蘇る。  
 記憶のかけらをつなげていく。  
 それは新たなかたちを生み出しつつ、髪の毛が伸びるように増殖していく。  
 穴だらけのゆがんだ空洞は記憶をのぞく万華鏡となる。

《万華鏡》は制作のテーマを「記憶」とし、記憶の蓄積と捉える髪の毛を象徴的に織り込んだ作品を多く発表してきた熊澤の代表作です。

1976(昭和51)年岩手県に生まれた熊澤は、多摩美術大学生産デザイン学科テキスタイル専攻に進み、そこで自分にぴったり合う素材「フェルト」と出会いました。フェルトは、ウール原毛・獣毛にアルカリ溶液や石けん溶液を含ませ、摩擦・圧力・熱を長時間加えることで毛の繊維をからませて作られるという今なお原始的な手法から生まれる布です。熊澤はこの不思議な素材にすっかり魅了され、大学卒業後にはフェルトの本場であるフィンランドに留学、以後ヨーロッパと日本を歩き来しながら日本、フィンランド、ハンガリー、イタリアなどでテキスタイルアート作品を発表してきました。

本展においては、ヨーロッパ各地の森を体験したあと当地熊野の森へとやってきた熊澤自身の中にある「森の記憶」がテーマとなります。

会期中には、年齢を問わず参加できる2回のワークショップも予定しています。

(学芸員 山本 泰代)

## 田辺市立美術館(本館)の休館について

本年4月から6月の3ヶ月間、田辺市立美術館(本館)は臨時休館いたします。これは平成23年春に新庄総合公園をメイン会場とした第62回全国植樹祭が開催される際に、当館が天皇皇后両陛下のご休息所となる予定になっていることと、開館15周年を迎えるにあたっての、施設設備の改修を行うもので、玄関前階段及びフロア等と、空調設備の工事を行います。この間ご迷惑をおかけしますが、7月19日からは特別展「海を想う」を開催いたしますので、リニューアルした美術館へのご来館をお待ちしています。なお、熊野古道なかへち美術館は、4月10日より館蔵品展「自然に学ぶ」を開催していますので、ご高覧いただけますようお願いいたします。

(館長 井口 富夫)

## 平成22年度

## 展覧会スケジュール

### 田辺市立美術館

H.22	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	H.23	1月	2月	3月
				①特別展 海を想う ―海に魅せられた画家たち― 7/19(月・祝)~ 9/12(日)			②小企画展 潮隆雄 タビスリー近作展 9/25(土)~ 11/7(日)		③館蔵品展 文人画館蔵作品展 (前期)11/20(土)~ 12/19(日) (後期)1/6(木)~ 1/30(日)				④特別展 原勝四郎展 2/11(金・祝)~ 3/21(月・祝)
			施設修繕のため休館 (4/1~6/30)	展示替のため休館		展示替のため休館		展示替のため休館					展示替のため休館
													展示替及び年末年始休館 12/20(月)~1/5(水)

### 熊野古道なかへち美術館

H.22	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	H.23	1月	2月	3月
				②特別展 森の記憶 ―熊澤明子テキスタイルの世界― 7/17(土)~ 9/5(日)			③館蔵品展 渡瀬凌雲展 ―南画家の展覧会― (前期)10/9(土)~11/28(日) (後期)12/11(土)~1/23(日)						④館蔵品展 野長瀬晩花展 ―晩花を楽しむ― 2/11(金・祝)~ 3/27(日)
			展示替のため休館			※展示替のため休館 美術館開放講座開催						展示替のため休館	
			①館蔵品展 自然に学ぶ ―雑賀清子の作品より― 4/10(土)~ 5/30(日)										展示替のため休館 年末年始休館 12/27(月)~1/4(火)

## REPORT 「生誕100年記念 浜口陽三展」記念講演会

10月24日(土)「浜口陽三展の舞台裏で」  
 11月28日(土)「浜口陽三入門 人と作品」  
 田辺市立美術館 研修室 14:00~15:30

田辺市立美術館では昨年の9月から12月にかけて、カラーメゾネットと呼ばれる独特の銅版画技法を開発し、その繊細な表現が今日も国際的な高い評価を得ている浜口陽三(1909~2000)の生誕100年を記念する特別展を開催しました。会期を3区分して、展示作品をすべて入れ替えながら開催し、第II期、第III期の会期中に和歌山県立近代美術館学芸員の井上芳子さんと国立新美術館特任研究員の三木哲夫さんをお迎えして記念講演会を開催しました。

井上さんは、和歌山県立近代美術館での「浜口陽三展」開催に至るまでの調査や、作品の手当、修復などの作業の経過といった「舞台裏」について、そしてそこから見てくる技法や表現の特徴、作品の魅力など、様々な切り口から浜口の芸術について語ってくれました。

三木さんは長く和歌山県立近代美術館に勤務されており、浜口の研究もそのときから始まったことなど自身の調査活動の経緯や、生前の浜口にお会いになったときの思い出、今後の研究課題に思われていること等々、作品集や著述集の編纂にも携わられてきた浜口研究の第一人者ならではの話を聞かせてくれました。

(学芸員 三谷 渉)



浜口陽三の作品や制作風景を紹介しながら解説する井上芳子 和歌山県立近代美術館学芸員(写真上) 三木哲夫 国立新美術館特任研究員(写真下)

## 新収蔵作品の紹介

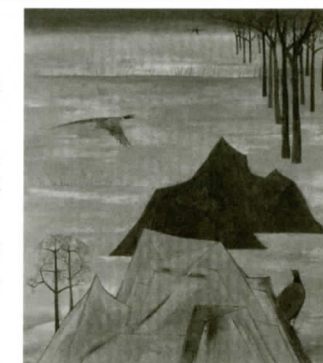
昨年度は稗田一穂(1920~)の作品5点を新たに収蔵しました(購入1点・寄贈4点)。

購入した作品《水影》(1962年/112.2×145.7cm/額装)は表紙に図版と、今回特別にご寄稿いただいた稗田氏の本人作品についての思い出も掲載しています。作者40歳代前半の充実した作品です。

寄贈を受けた4点はすべて稗田氏からお譲りいただいたものです。大阪市立工芸学校在学中の学内展への出品作《温室》(1937年/73.1×97.9cm/額装)、戦後間もなく開催された第3回日本美術展への出品作《羽黒の御塔》(1947年/198.4×127.0cm/額装)、第20回新制作協会展で発表された《荒原》(1956年/157.2×139.6cm/額装)の3点は、当館が1997(平成9)年に「稗田一穂展」を開催した折からお預かりしていたものです。加えて、長らく所在が不明で近年作者の元に戻ってきた、第2回創造美術展への出品作《花と兎》(1949年/154.7×141.5cm/二曲屏風)もご寄贈いただきました。いずれも画家の若き日の制作を振り返るときには、見落とすことのできない重要な作品です。

開館前、美術館開設準備室のときに始まる作品の収集、紹介の活動にご理解をいただいたもので、今後も継続して力を注いでゆきたいと思っております。

(学芸員 三谷 渉)



稗田一穂《荒原》 1956(昭和31)年